

人々の営みに魅せられて

美しい風景を支える現実を記録する

シニアライフアドバイザー 松本すみ子

高知県の山村にはまもなく消滅する可能性のある集落がいくつもある。そこで暮らす人々の営みを撮影し、多くの人に現状を伝える活動を続けているのが藤田茂男さんだ。最初は写真コンクールに出すための棚田や農山村の風景を撮影していた。ある日、美しい風景も棚田も高齢な人たちが守っているのだと気づき、その維持がいかに危ういものかも知った。以来、現実を伝える記録写真家として活動を続けている。

遠距離恋愛で横浜から高知へ

藤田茂男さん（71歳）は横浜の出身だ。23歳で高知に移住し、今ではすっかり高知人。お酒も高知の人並みに強いのかと聞いたたら、「それ以上」と言って笑った。ただし、67歳のときに脳梗塞を患い、それからはお酒は完全に止めていそうだ。

移住のきっかけは、高知の女性との文通。この出会いに触れないわけにはいかない。藤田さんが20歳のころ、若者の手記を掲載する雑誌があった。そこに、小学1年



山村の生活と現状を記録する藤田茂男さん

で小児まひに罹り、障害をかかえている女性の投稿があった。それを読んだ藤田さんは、障害者も健常者とともに歩むのが本来の姿ではないかという感想を送った。それから文通が始まり、次第に友情を超えた愛情へと変わっていった。しかし、松葉杖での慣れない都会暮らしは難しく、「結婚するのであれば、高知に来てくれんろうか」と言われた。問題は高知で仕事をみつけることができるかどうかだ。当時の若者は田舎から都会に向かうのが普通。その逆だから、何かやらかして地方に流れてきたのではないかと思われた。苦労したが、そのころに花形だった電気工事士の資格を持っていたことが幸いした。

横浜の実家には納得させたが、「障害者と健常者の結婚はありえない、一時的な感情で長続きするはずがない」と、奥さんの両親は大反対。娘につらい思いをさせたくないという親心だった。それで

も、藤田さんは移住を決行。まもなく24歳という節分の日に身内だけの式を挙げた。籍を入れないこと、育てられないから子供は作らなかったのは半年後、妻の両親から感謝の言葉をかけてもらったのは、27歳で子供ができてからだという。

山村の人々の営みを撮る！

そんな経緯から、さぞかし奥さんに寄り添って生きてきたのではないかと思ったら、まったく違っていた。20代でクレーンや生コンクリートなどを運ぶ船の電気関係の仕事を始め、50代で保守業務に就くまで、転職を4回、その間に独立して自営業になったこともある。出張仕事が多く、仕事の鬼で家に帰らない日が多かった。「女房はよく頑張った。人に頼るのがものすごく嫌いな、高知の“はちきん”でね（笑）」。

仕事も家庭も順調だったが、転職がやってきた。63歳のとき、喉

にポリープができたのだ。癌ではなかったが、手術後も腫れが引かない。これ以上の手術はいやだと「沈黙療法」を選択した。これは1か月間まったくしゃべらないという療法。思い切って退職し、人と会わない、話さないための手段として、カメラを持って山を歩き回った。

その後、好きな風景写真家の写真教室に参加し、本格的に風景や植物の写真を撮り始める。写真展にも応募した。このころはいかにきれいに自然の風景を切り撮るかが最大の関心事だった。



写真はアルバムにして差し上げる

* はちきん：負けん気が強い「男勝りの女性」のこと